

## テニス部師弟調教 → 逆転支配 ～元エースの淫らな屈服と後輩の覚醒～

### 目次

第1話：手紙「服従の始まり」

第2話：手紙「コートの下で」

第3話：手紙「嫉妬の炎」

第4話：手紙「裏切りの予感」

第5話：手紙「君への決意」

第6話：手紙「コートの向こう側へ」

第1話：手紙「服従の始まり」

親友へ

これを書いている今も、手が震えている。

お前には言えなかった。誰にも言えない。でも、書かずにはいられなかった。

神崎先輩に――抱かれた。

いや、違う。

「抱かれた」なんて生易しいものじゃなかった。

俺は、犯された。

夏の合宿を一週間後に控えた七月の終わり、部室に残っていたのは俺と神崎先輩だけだった。

窓から差し込む西日が、床に散らばったラケットやボールの影を長く伸ばしている。練習着のまま椅子に座り込んでいた俺の鼻腔を、汗の染み込んだタオルと革のグリップテープ、それに制汗剤の人工的な香りが刺激した。部室特有の、男の匂いが充満した密室。

「高瀬」

先輩の声が、静寂を切り裂いた。

びくりと肩が跳ねる。顔を上げると、ロッカーの前に立つ先輩の背中が見えた。Tシャツに汗が張り付いて、鍛え上げられた背筋の筋肉の起伏がくっきりと浮かび上がっている。

「は、はい」

掠れた声が出た。今日の練習でまた、俺はミスを繰り返した。先輩の厳しい視線が、コート上で何度も俺を射抜いた。

「お前、本気でやってんのか」

振り返った先輩の表情は、予想通り陰しかった。短く刈り上げた黒髪、日焼けした精悍な顔立ち、そして——俺を見下ろす、鋭い眼光。

「や、やってます」

「嘘つくな」

一歩、先輩が近づく。

俺は椅子から立ち上がろうとして、ふらついた。足に力が入らない。いつもそうだ。先輩の前では、身体が思うように動かなくなる。

「お前の動き、全部見てた。腰が引けてる。ボール追いかけるのに躊躇してる。そんなんで、合宿で通用すると思ってんのか」

「すみません……」

「謝るな。変われ」

また一歩、距離が縮まる。

先輩の匂いが、濃くなった。汗、それに制汗剤でも隠し切れない、男の体臭。少し酸っぱくて、でも——どうしようもなく、俺の鼓動を速くさせる匂い。

「どうすれば、変われるんですか」

俺の声は震えていた。

先輩は答えなかった。ただ、じっと俺を見つめている。その視線の強さに、俺は目を逸らすことができない。

「高瀬」

「はい」

「お前、俺のこと、怖いか」

予想外の質問だった。

「え……」

「怖い、って聞いてんだ」

怖い。そう、怖かった。神崎陸という存在は、俺にとってあまりにも大きすぎた。元エース、プロを目指していた天才、でも怪我で夢を諦めた人。その挫折を背負いながら、後輩たちに容赦なく技術を叩き込む鬼教官。

でも——

「怖い、です。でも……」

「でも？」

「懂れて、ます」

言ってしまった。

先輩の表情が、ほんの少し変わった。眉間の皺が緩み、口元に——それは笑みと呼べるのか分からないけれど——何かが浮かんた。

「そうか」

そして、先輩は俺の目の前まで来た。

あと一步で触れ合う距離。見上げる俺の視界を、先輩の顔が覆い尽くす。茶色く日焼けした肌、汗で濡れた首筋、喉仏の上下する動き——全てが、あまりにも生々しい。

「高瀬」

「は、はい」

「お前、本当に強くなりたいのか」

「なりたい、です」

「嘘じゃないな」

「嘘じゃ、ないです」

先輩の手が、ゆっくりと伸びてきた。

その手が俺の頬に触れる。大きくて、硬くて、熱い手。ラケットを握り続けてきた掌の、こわついた感触。

「だったら」

先輩の顔が近づく。

「俺に、全部、預けろ」

唇が、重なった。

——頭が真っ白になった。

何が起きているのか、理解できなかった。神崎先輩の、唇。柔らかくない。少し乾いていて、でも熱くて

「んっ……」

思わず声が漏れた瞬間、先輩の舌が俺の口の中に滑り込んできた。

「ん、んんっ……！」

抵抗しようとした。でも、先輩の手が俺の後頭部を掴んで、逃がさない。舌が絡みついてくる。唾液が混ざり合う。呼吸ができない。

ちゅぷ、ちゅば……

水音が部屋に響く。

先輩は、容赦なかった。舌で俺の口内を蹂躪し、吸い上げ、支配していく。俺はただ、されるがまま。膝から力が抜けて、先輩にもたれかかるようになっていた。

「ぶはっ……」

ようやく唇が離れた。

銀色の糸が、二人の唇を繋いでいた。それを先輩の舌が舐め取る。俺は呼吸を整えることもできず、ただ先輩を見上げていた。

「お前、キス、下手だな」

「す、すみま……」

「謝るな、って言っただろ」

先輩の手が、今度は俺のＴシャツの裾を掴んだ。

「ちょ、待っ……」

「待たない」

ぐい、と引っ張られる。Ｔシャツが頭の上を通過して、脱がされた。上半身が露わになる。まだ筋肉のついていない、締まりのない身体。先輩の身体と比べたら、子供みたいだ。

「恥ずかしが、るな」

先輩も、自分のシャツを脱いだ。

目の前に現れたのは――完璧に鍛え上げられた、男の身体。盛り上がった大胸筋、くっきりと割れた腹筋、引き締まった腰。全身に薄く汗が光っている。そして、胸から腹にかけて生える、濃い体毛。

俺は、見とれていた。

「触れ」

「え……」

「触ってみろ、って言ってんだ」

命令口調。

俺の手が、おずおずと伸びた。先輩の胸板に、指先が触れる。

熱い。

それが最初の感想だった。そして、硬い。筋肉の塊。触れているだけで、こちらまで熱くなってくるような、圧倒的な存在感。

「もっと、触れ」

言われるままに、俺は両手で先輩の胸を撫でた。掌に伝わる体温。汗の湿り気。そして――

「んっ……」

先輩の乳首に指が触れた瞬間、小さく息を吐く声。

硬くなっている。

「お前、もしかして」

先輩の手が、今度は俺のハーフパンツに伸びてきた。

「や、やめ……」

「もう、勃ってんだろ」

掌が、俺の股間を撫でた。

ビクン、と腰が跳ねる。

嘘をつけなかった。もう、ずっと前から――先輩にキスされた瞬間から、俺のペニスは硬くなっていた。ハーフパンツの中で窮屈に膨らみ、下着を押し上げている。

「正直で、いいじゃねえか」

先輩の手が、ハーフパンツのウエストに指をかける。

「ま、待って、待ってください……」

「嫌か」

「いや、嫌じゃ、ないけど……」

「だったら」

ずるり、と引き下ろされる。

ハーフパンツが足首まで落ちる。次いで、下着も。

俺の下半身が、完全に露わになった。

勃起したペニス。中肉中背の俺には、やや小さめの、でも今は硬く反り返っている性器。先端から、透明な液体が糸を引いている。

「いい反応だ」

先輩がしゃがみ込んだ。

目の前に、先輩の顔。

「ちょ、せん、ば……」

「声、出すなよ。外に聞こえる」

そして——先輩の舌が、俺の亀頭を舐めた。

「ひ、あ……っ！」

電撃が走った。

ぬるり、と温かく濡れた感触。先輩の舌が、俺の先端を這う。カリの裏側を、執拗に刺激する。先走りの液体を舐め取っていく。

「ん、ちゅ……」

音を立てて、吸われる。

「あ、あ、だめ、そんな……」

腰が勝手に動く。でも、先輩の手が俺の腰を押さえつけて、逃がさない。

ちゅば、じゅる、ちゅぷ……

水音が、部室に響き渡る。

先輩の口が、徐々に深く俺のペニスを咥え込んでいく。温かい。柔らかい。でも、舌の動きは容赦ない。

裏筋を這い、カンを刺激し、鈴口に舌先を押し込んでくる。

「ん、んっ、せんぱい、も、もう……」

「まだ、だめだ」

唇を離して、先輩が言った。

「我慢、しろ」

「む、無理、です……」

「無理じゃない」

ぐぶ、と再び深く咥えられる。

このままじゃ――

「あ、あっ、だ、だめっ……！」

限界だった。

射精の予感が、下腹部から押し寄せる。でも、先輩は離してくれない。むしろ、もっと激しく、もっと深く――

「んっ、ん、ん――っ！」

声を殺そうとして、歯を食いしばる。でも、我慢できない。

どびゅ、びゅる、びゅるるっ……

先輩の口の中に、射精した。

白濁した精液が、脈打つペニスから噴き出す。先輩は、それを全部飲み込んだ。喉を鳴らして、咀嚼するように、俺の精液を飲み干していく。

「ぶは……」

ようやく口を離した先輩が、俺を見上げた。

口元に、白い液体が少し残っている。それを、舌で舐め取る。



「思ったより、濃いな」

「す、すみま……」

「謝るな」

先輩が立ち上がった。

「高瀬」

「は、はい」

「次は、お前の番だ」

先輩が自分のハーフパンツに手をかける。

ずる、と下ろされる。下着も一緒に。

そして――

現れたのは、俺のものとは比べ物にならない、太くて長い、男の性器。

半勃起の状態でも、明らかに俺のものより大きい。亀頭は赤黒く、血管が浮き出ている。そして、先端からは――

ぬるり、と透明な粘液が滴り落ちている。

「舐めろ」

「え……」

「俺の、舐めろ」

命令。

俺は、震える手を伸ばした。先輩のペニスに触れる。熱い。そして、硬い。触れた瞬間、ビクン、と脈打った。

「口で、やれ」

言われるがまま、俺はしゃがみ込んだ。

目の前に、先輩の股間。濃い陰毛、張り詰めた太もも、そして——圧倒的な存在感を放つ、巨大な性器。

汗と、精液の匂いが鼻を突く。

「ほら」

先輩の手が、俺の後頭部を掴んだ。

顔を、先輩のペニスに押し付けられる。

「んっ……」

頬に、熱い肉棒が当たる。匂いが、濃くなる。男の、獣のような匂い。

「舐めろ、って言っただろ」

俺は、恐る恐る舌を出した。

先輩の亀頭に、舌先が触れる。

ぬるり。

先走りの液体が、舌に絡みついた。少し苦くて、でも——不思議と、嫌じゃなかった。

「ん、ちゅ……」

舐める。亀頭の表面を、カリの裏側を、裏筋を。見よう見まねで、さっき先輩がしてくれたことを真似る。

「ふ……悪くねえ」

先輩の声が、少し掠れている。

それが嬉しくて、俺はもっと一生懸命舐めた。唾液と先走り液が混ざり合って、先輩のペニスを濡らしていく。

ちゅば、じゅる……

「口に、入れてみる」

言われて、俺は口を開けた。

ゆっくりと、先輩のペニスが口の中に侵入してくる。

大きい。

口いっぱい広がる、肉の感触。舌の上に乗る、重さ。そして、喉の奥まで届きそうな、長さ。

「んっ、んぐ……」

「もっと、奥まで」

先輩の手が、俺の頭を押す。

「ん、んんっ……！」

無理やり押し込まれる。喉が圧迫される。息ができない。涙が滲む。

「んっ、ぐぶっ……」

でも、先輩は容赦しない。

腰を使って、俺の口を犯していく。

ずぶ、ずぶ、ぐぼ……

卑猥な水音。唾液が溢れて、顎を伝う。鼻水も出てくる。でも、止められない。

「高瀬、いい、声、出してる」

先輩の声が、遠くに聞こえる。

もう、何も考えられなかった。ただ、口を開けて、先輩のペニスを受け入れることだけ。

どれくらい時間が経ったのか分からない。

「そろそろ、いいか」

ようやく、先輩のペニスが口から抜けた。

ぷは、と呼吸を取り戻す。唾液の糸が、俺の唇と先輩のペニスを繋いでいる。

「立て」

命令されて、ふらふらと立ち上がる。

先輩が、俺の身体を回転させた。

壁に、手をつかされる。

「え……」

「そのまま」

背後から、先輩の身体が密着してくる。

胸に、先輩の胸板。腰に、先輩の腰。そして――

尻の割れ目に、硬く熱いものが押し当てられる。

「ちょ、待って、それは……」

「待たない」

先輩の指が、俺の尻の割れ目を撫でた。

「ひ、あ……」

アナルの入り口を、指先が刺激する。

「力、抜け」

「む、無理……」

「無理じゃ、ない」

ぬぶ、と指が入ってくる。

「ひあっ……！」

痛い。

でも、先輩は止まらない。指を少しずつ押し込んでくる。内壁が、無理やり押し広げられる。

「痛い、です、痛い……」

「すぐ、慣れる」

指が、奥まで入った。

そして——動き始める。

ぬちゅ、ぬちゅ……

指が、俺の中を掻き回す。痛みが、徐々に——違う感覚に変わっていく。

「あ、あ……」

「ここ、だな」

指先が、何かに触れた。

ビクン！

身体が跳ねる。

「ひ、あぁっ……！」

「前立腺、だ」

先輩の指が、執拗にその場所を刺激する。

ぐり、ぐり、ぐり……

「だ、だめ、そこ、そこ……っ！」

快感が、痛みを上回った。

腰が勝手に動く。先輩の指を、もっと深く求めてしまう。

「ほら、また勃ってる」

もう一方の手で、俺のペニスを握られる。

「ひあっ……！」

さっき射精したばかりなのに、もう、また硬くなっている。先端から、先走り液が溢れている。

「いい子だ」

先輩の指が抜けた。

そして――

もっと太いものが、押し当てられる。

「待って、待ってください、それは、入らない……」

「入る」

「無理、です……」

「お前、俺のこと、信じてないのか」

その言葉に、俺は黙った。

信じている。神崎先輩を、信じている。

だから――

「力、抜け」

従った。

ぬぷ、と亀頭が入り口を押し広げる。

「あ、あ、ああ……っ！」

痛い。

裂けるような痛み。

でも、先輩は優しくも、ゆっくりと押し込んでくる。

ぬふ、ずふ、ずふふ……

「痛い、痛いです、せんぱい……」

「我慢、しろ」

「無理、です……」

「無理じゃ、ない」

ずぶり。

根元まで、入った。

俺の中に、先輩の全てが埋まっている。

「あ、あ……」

「ほら、入った、だろ」

先輩の声が、耳元で響く。

そして――動き始めた。

ずふ、ずふ、ずふふ……

「あ、あ、ああ……っ！」

痛みと快感が混ざり合う。

先輩のペニスが、俺の内壁を擦る。奥に、届く。前立腺を、突き上げる。

「ひあ、あ、そこ、そこ……っ！」

「ここ、か」

ぐり、と挟られる。

「ひああああっ……！」

もう、我慢できなかった。

腰が勝手に動く。先輩の腰に、尻を押し付ける。もっと、もっと奥まで――

「いやらしい、身体、してるじゃねえか」

「ち、違、あ……」

「嘘、つくな」

パン、パン、パン……

肉と肉がぶつかり合う音。

ずぶ、ずぶ、ぐちゅ、ぐちゅ……

卑猥な水音。

部室に、響き渡る。

「あ、あ、もう、もう……っ！」

「まだ、だめだ」

「む、無理……っ！」

「我慢、しろ」

でも、無理だった。

射精の予感が、再び押し寄せる。

先輩の手が、俺のペニスを握る。

シュコ、シュコ、シュコ……

扱かれる。

「あ、あ、だめ、だめ……っ！」

「いいぞ、イけ」



「ひ、あ、ああああっ……！」

どびゅ、びゅる、びゅるるるっ……

壁に向かって、射精した。

白濁した精液が、勢いよく飛び散る。二度目なのに、量が多い。先輩に犯されながらのオーガズム——それは、想像を絶する快感だった。

「あ、あ……」

脱力する。

でも、先輩はまだ止まらない。

ずぶ、ずぶ、ずぶ……

「せん、ば……も、もう……」

「俺は、まだだ」

さらに激しくなる。

ぐちゅ、ずぶ、ぐぼ、ぐぼ……

「高瀬」

「は、い……」

「お前、いい、ケツ、してる」

「あ……」

「もう、離さねえ」

その言葉と同時に——

ずぶり、と奥まで突き刺さる。

ビクン、ビクン、ビクン……

先輩のペニスが、俺の中で脈打つ。

どびゅ、びゅるる、どくどくどく……

熱いものが、俺の奥に注がれる。

先輩の、精液。

「あ、あ……」

ぐったりと、壁にもたれかかる。

先輩のペニスが、ゆっくりと抜けていく。

ずる、ぬふ……

アナルから、精液が垂れてくる。

「高瀬」

「は、い……」

「お前、いい、声、出してた」

「……」

「これから、毎日、教えてやる」

先輩の手が、俺の頭を撫でた。

「強く、なりたいんだろ」

「……はい」

「だったら、俺に、全部、預けろ」

その言葉の意味を、この時の俺は、まだ理解していなかった。

親友へ

俺は、変わった。いや、変えられた。

神崎先輩の、ものに、なった。

これが、正しいのか、間違っているのか、分からない。

でも――

俺は、もう、後戻りできない。

次の手紙を、書けるかどうか、分からない。

でも、もし書けたら――

それは、俺がまだ、生きている証だ。

春樹

## 第2話：手紙「コートの下で」

〇月〇日

日記を書くのは、中学生以来だ。

でも、誰にも見せられない、この気持ち。どこかに吐き出さないと、俺は壊れてしまいそうだった。

合宿が始まって、三日目。

昼間の神崎先輩は、相変わらず厳しい。いや、以前よりもっと厳しくなった気がする。

でも、夜になると――

合宿所は山奥の施設で、最寄りの駅から車で一時間もかかる場所にあった。周囲を森に囲まれ、夜になると虫の声と風の音しか聞こえない。

部員たちは二段ベッドの相部屋で雑魚寝だが、俺はなぜか一人部屋を割り当てられた。先輩の指示だと、

監督が言っていた。

「高瀬は技術的な課題が多いから、夜も個別指導が必要になる」

表向きの理由は、それだった。

でも、本当の理由は――

三日目の夜。

消灯時刻を過ぎて一時間ほど経った頃、部屋のドアがノックされた。

心臓が跳ねる。

分かっていた。誰が来るのか。

「入って、ます」

掠れた声で答えると、ドアがゆっくりと開いた。

暗闇の中に、先輩のシルエット。

「起きてたか」

「はい」

先輩は音を立てないように部屋に入り、ドアを閉めた。鍵をかける音。

月明かりだけが、カーテンの隙間から差し込んでいる。

「今日の練習、どうだった」

「あの、厳し、かったです」

「そうか」

先輩がベッドの端に腰を掛けた。俺は壁際に背中を預けて座っていた。

「でも、お前、少し良くなってる」